

富永智津子・永原陽子編

新しいアフリカ史像を求めて 女性・ジェンダー・フェミニズム

(2006 御茶の水書房 518P 4,700円+税)



富永智津子

本書に収録した15本の論文は、2000-2003年の4年にわたる研究会「アフリカ女性史に関する基礎的研究」(国立民族学博物館地域研究企画交流センター・連携研究)と2002年秋に開催した国際シンポジウム「女性/ジェンダーの視点からアフリカ史を再考する——奴隷制・植民地経験・民族主義運動とその後」(同上・特別共同研究)に提出された報告の中から選んだ。本書は五部構成となっており、それぞれに収録されている論文の概要は以下の通りである。

第一部 フェミニズムと歴史

アミナ・ママ論文「フェミニストによる歴史がアフリカを変革する——過去を利用して、現在を再構築し、未来を想像する」の論点は、西欧と一部のアフリカ人エリートが創造した歴史資料という知的遺産への批判に集中している。この知的遺産が、どのような不条理を生み出すかを、ママは、ナイジェリアの北部で起こった「アミナ・ラワル事件」(婚外子を出産したとしてイスラーム刑法にもとづき、死刑を宣告された事件)を通して分析する。一般大衆がアミナ・ラワルの死刑を支持した背景には、支配者にとって都合のよい神話や、日和見主義的な政治家や魔術師によって、一般大衆がいつも簡単に操られる状況があり、そうした状況は、一方で正しい知識を一般大衆に伝達する教育の欠如、他方で軍事独裁体制崩壊後の政治的不安定と深く関係しているというのである。

タンザニアを拠点に研究を社会変革に結びつけるべく実践活動を行っているマージョリー・ムビリニ論文「タンザニアにおける女性史研究——過去と現在」は、植民地史観からナショナリスト史観へ、さらにラディカル・ヒストリーへと続く歴史研究の流れを唯物史観との比較を交えながら批判的に検証した後、フェミニストによる歴史を、植民地フェミニズムから批判的第三世界フェミニズムへと続く展開の中で簡潔に紹介している。ムビリニは、植民地機構が必ずしも抑圧的に作用しなかった側面をどう考えるか、その複雑さこそ、ジェンダー分析が明らかにすべき課題であるとしている。

吉國恒雄論文「マイ・ムソジとアフリカ人女性クラ

ブ——ジンバブウェにおける「アフリカ・フェミニズム」の誕生」は、1950年代のジンバブウェ都市部で生活改善に精力的に取り組んだひとりの女性と、彼女が設立した「アフリカ人女性クラブ」に焦点を当てている。吉國が描こうとしたのは、都市の女性人口の大半を占める普通の主婦の実践である。それは、「初期植民地都市に住むアフリカ人女性を、もっぱら失踪者、売春婦、情婦といったタイプの女性とみなし、研究対象をこうした(解放された)女性に定める傾向が強かった」従来の女性史研究者に対する吉國の批判が込められている。

富永智津子論文「史料の中の女性たち——スワヒリ史再考の試み」は、スワヒリ史をひもといた研究者にとってはなじみ深い史料、あるいはあまり注目されてこなかった裁判資料などを取り上げ、その中で女性がどのように描かれているかをフェミニズムの視点から分析している。

第二部 奴隷制の再考にむけて

クレア・ロバートソン論文「奴隷制再モデル化の試み——世界史的比較と展望」では、世界史的視点に立った奴隷制の再モデル化が提唱されている。モデル化の軸として議論の対象になっているのは、①女奴隷の地位/階層と権利、②女奴隷の労働、③アイデンティティ、エージェンシー、市民権、の3点である。

マーガレット・シュトローベル論文「東アフリカ沿岸部における奴隷制と女性——地位・労働・アイデンティティ」は、ロバートソンが提唱した3つの軸を使用し、スワヒリ社会の奴隷制の世界史的視点からの比較を試みているが、むしろ本論文の特徴は、奴隷制が廃止されたのち、女性の元奴隷たちが選択した生き方や価値観の変化に関する個別具体的な資料分析にある。それらは、環境や主人との関係に大きく規定されていたが、そんな中でも、彼女たちは自分たちの生き方を主体的に選択していたことを、元奴隷やその子孫の語りから明らかにしている。

第三部 抵抗運動史の再検討

タデウス・サンセリ論文「マジマジ反乱(タンザニア)再考——ジェンダー史とナショナリスト歴史学の伝統」は、

ザラモ社会を事例に、従来のマジマジ反乱像をくつがえす新しい歴史像を提示している。つまり、ザラモの村長が、南部から伝わってきた反乱の噂に呼応して抵抗運動に立ちあがったのは、ドイツによって植民地支配によって喪失した住民や女性に対する権威を男性(村長)が取り戻し、ドイツ統治以前へと時計のネジを巻き戻すためだったとして、この反乱を、植民地支配への超民族的初期抵抗として一元的に描くナショナリスト観への疑問を提示している。

栗田禎子論文「オムドゥルマーンの娘たち——19世紀スーダンのマフディー運動と女性」は、マジマジ反乱と同じく、スーダンにおける近代ナショナリズムの原点とされてきたマフディー運動における女性の役割を論じている。見えてきたのは、女性たちの積極的な運動への参加であり、それは、戦いにおいても、それを支える経済活動においても展開された。しかし、運動指導部は、女性たちの働きを認めながらも、結局「イスラーム的」な家父長的ジェンダー規範を優先する方向に舵を切った、というのである。

モニカ・セハス論文「女性の眼でみるアパルトヘイト——1950年代の『南アフリカ女性連盟』(FSAW)の事例」は、50年代に稀有な非人種組織として結成された「南アフリカ女性連盟」を取り上げ、その運動の理念を分析している。そこから見えてくるのは、反アパルトヘイトを掲げながら、一方で男性主導の運動が抱えるジェンダー秩序に抗議し、ひいては当時の南アフリカ社会のジェンダー秩序そのものを祖上にのせてゆく女性たちのスタンスである。

第四部 生活史の中のジェンダー闘争

パトリシア・ヘイズ論文「北部ナミビアの歴史と女性のイニシエーション」は、女性の成人儀礼を長期的な変動の中で考察している。第一次大戦以後の南アによる支配の中で儀礼がスペクタクル化していく様子をおとづけたヘイズは、そこに、植民地化以前の王権の集中過程における儀礼の変化との共通性を見出した。また、この儀礼を写真で記録した植民地官僚に注目することによって、ジェンダー化された視線と表象のもつ権力性を浮き彫りにするというポストモダンの手法も援用している。

アイリス・バーガー論文「南アフリカにおけるジェンダー闘争——アフリカ史の再概念化に向けて」では、ジェンダーの視点から南アフリカのアパルトヘイト体制を考えるための3つの切り口が提示される。アパルトヘイトを人種・階級のみでなく、女性に対する支配という観点から再解釈すること、労働者階級の歴史を女性の労働実態に即して再検討すること、解放の思想と実践をアフリカ人とアフリカ系アメリカ人のある活動家夫妻の事例を通して世界的な広がりの中で分析することである。特に第3点からは、男性性に視野を広げることで、関係性の概念としてのジェ

ンダーがいっそう精緻なものとなることが示される。

マージョリー・ムビリニ論文「罪深き人々とアウトサイダーたち——ルングウェ県(タンザニア)におけるエイズのドラマ」は、現代タンザニアにおけるエイズをめぐる一般の人々の考えや行動を、当事者との討論を通じて仔細に紹介し、それをジェンダーの視点から歴史的に分析している。集村化と国際的な支援のもとで展開した換金作物栽培の行き詰まりを契機とした女性たちの出稼ぎ労働が男女の位置を大きく変化させ、そのことがエイズをめぐる人々の判断や行動を左右する中で、偏見やスティグマと向き合う女性たちの姿が生き生きと描かれている。

第五部 歴史と文学のはざま——女性たちの語りから

レロバ・モレマ論文「南部アフリカにおける女性たちの声——歴史の書き換え」は、著者自身が関わった国際的なプロジェクト「アフリカ女性文集」の編集についての紹介である。

テルマ・ラヴェル＝ピント論文「南アフリカの女性たち——闘争と亡命の語り」は、モレマと同じ考えから、アパルトヘイトと闘った南アフリカの女性たちの歴史に光を当てている。

デズリー・ルイス論文「家父長的ナショナリズムの再検討——イヴォンヌ・ヴェラの『ネハンダ』について」は、19世紀末の「ローデシア」で、イギリスによる植民地支配に対して立ち上がった人々の運動(第一次チムレンガ)の中から現れ、その霊的な力により人々を率いた女性ネハンダを題材とした小説を取り上げている。

おわりに

以上の紹介を通して見えてきたのは、女性やジェンダーやフェミニズムの切り口である。それらが、それぞれに従来の「小さな物語」の歴史認識を問い直す作業であることは、各論文が示している。問題は、それらをいかにして「大きな物語」の再構築や再概念化へと深めていけるか、であろう。この点に関して本書は、「フェミニズム」を単なる男性と女性の権力関係の問題に限定したり、本質的な機能からの女性の解放のみに矮小化したりする視点を相対化することによって、その可能性を示したといえよう。

世界の人口の半分を占める女性を排除してきた従来の学問体系が、「女性」を視野に入れることによって見直されねばならないことは、もはや疑いない。そうしたアクションは、すでにあらゆる専門領域で始まっている。歴史学の領域においても例外ではない。その鍵を握るのは、「ジェンダー」や「フェミニズム」が、人種や階級や民族とクロスする分析概念としていかに有効であり得るか、という一点に絞られてきているように思われる。

(とみなが・ちづこ 宮城学院女子大学教授)